

2012年 京都キリスト召団集会だより（抜粋）目次

- 2012年1月8日 「生命、光、希望」——ヨハネ伝と詩篇より——
2012年1月15日 「御霊の祈り」
2012年1月29日 「イザヤ書第1回」
2012年2月5日 「ユダとエルサレムについての預言」
2012年2月12日 「永遠の都」
2012年2月19日 「インマヌエル」
2012年3月11日 「Y姉妹を天に送りて」
2012年3月18日 「新生」
2012年3月25日 「聖霊の力により」
2012年4月15日 「愛は断じて滅びない」
2012年5月13日 「森下一男兄を天に送りて」
2012年5月20日 「いかなる時にも神により頼め、聖前に心を注ぎ出せ」
2012年6月3日 「キリストの弟子たるの道」
2012年6月10日 「キリストの弟子たちの道（続）」
2012年6月17日 「生命を保つ道」
2012年6月24日 「イエスの福音」
2012年7月1日 「汝ら之に聴け」
2012年7月8日 「隅の首石、霊の家」
2012年9月2日 「超絶・全能・全智の神」
2012年9月9日 「イザヤ書の背景と周辺」
2012年9月16日 「ヨシヤ王の宗教改革」
2012年9月30日 「民の二つの悪」
2012年9月23日 「ユダ王国の滅亡とエレミヤ」
2012年10月7日 「涙の泉」
2012年10月28日 「エレミヤの嘆きと祈り」（エレミヤ書（4））
2012年11月4日 「エレミヤ書前半のまとめ」
2012年11月11日 「エレミヤの生命がけの預言と希望の預言」
2012年11月18日 「主の限りなき愛と新しい契約」
2012年11月25日 「エホヤキムとゼデキヤの治世のもとでのエレミヤの経験」
2012年12月2日 「エレミヤの命がけの預言の言」
2012年12月16日 「周辺諸国に対する預言」
2012年12月26日 「クリスマスの恵み」



「生命、光、希望」——ヨハネ伝と詩篇より——

2012年1月8日

聖書朗読 ヨハネ福音書5章19～29節

新年おめでとうございます。先生や兄弟姉妹とともに、2012年第1回聖日集会が鴨川の畔の祈りの家でもたれました。

講筵では、ヨハネ福音書が示す次元は、人の想像を超えた高いものであることを英文聖書も参考にしながら語られました。

キリストを慕う魂は、直ちに光の中にあります。キリストに触れることによって、肉体の死をもつては終わらない霊的生命をいただき、生きた靈魂として蘇ります。聖霊の働きによって、天の父と御子キリストとの間に成り立っていたユニット（絆）に我々も加えられ、天の次元へと引き上げられました。

これには、特別の修行を要するのではなく、何の条件も付けずに全てを神様が備えてくださる永遠の生命でないと生きられませんとすがりつき、委ねる魂になることがキリストとの結ばれる最短距離なのです。このことは、万人にとって可能なことなのです。

既にお知らせしましたように、ユーストリームによる配信をしています。視聴するためにはパスワードが必要です。パスワードをご希望の方は、集会宛て又は村岡宛に連絡ください。

kyotoshodan@almond.ocn.ne.jp a-yasu2819@ares.eonet.ne.jp



「御霊の祈り」

2012年1月15日

聖書朗読 □ローマ書8章26～39節

鴨川べりから京都の北山を見ると白く雪が積もっている。東北や雪国では寒さと雪への闘いがされていることを思う。

集会の始めにO姉が入院されたことをお聞きした。そのほか病を抱える者、かんなん艱難の中にある者が多く、集会に試練が臨んでいる。私達は昨年、小冊子『試練の中での希望』をいただいた。また昨年11月から年末にかけての「続・試練の中での希望」連続講筵の中で、主キリストへの徹底的な信頼、立ち帰り、忍耐を学び、クリスマス講筵の

「我は道なり、真理なり、生命なり、我を食らい我を飲め」

へと導いていただいた。

奥田先生は今日の講筵で、これらを振り返り、

「今、集会に対して試練が臨んでおり、『試練の中での希望』として語った内容が預言のように思われる。今、その御言葉を本気で受取るのか、キリストを『いのちがけ』で生きているのかが問われている。見ゆる世界だけに留まっていたら勝利はない。キリストは相対的な生死を問題にしていない。私（キリスト）に真に触れた者は永遠の生命いのちだよと、主は両手を広げて待つておられる。」と熱く告白された。

「御霊も我らの弱きを助け給う。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御

霊みずから言い難きうめきをもて執り成し給う。」（ロマ書8章26節）

「御霊の祈り」の心は、私達の祈りに応えて御霊ご自身が祈つてくださること、私達は御霊の執り成しを「よりどころ」として祈ることができること。

今日は詩篇からも多くの励ましをいただいた。

「主はわが光 わが救い わが生命いのちの力なり。主は艱難なやみの日にその行宮かりいおの中に我をひそませ、……巖いわおの上に我を高く置き給うべければなり。」（詩篇27篇）

「主の手から苦しみも喜びも安んじて受け、ひるんではならない。……信じなさい、まことの生命いのちは、悲しみの日に植えられることを。」（ヒルティ「眠られぬ夜のために」

第一部3月15日抜粋）

主の熱愛が一人一人にかけられていることを深く受け取りたい。O姉と試練の中にある兄弟に、皆さんの「御霊の祈り」を切に願います。



イザヤ書 第1回

2012年1月29日

聖書朗読 イザヤ書1章1～20節

奥田先生の奥様が大変な時にも関わらず、この日も変わらず集会が行われたことに感謝いたします。この集会が、如何にこの世の次元と異なった天国的な恵まれた空間・時間であるかを、この世の現実を生きることによって、本当に実感しています。この集会で語られる福音や、兄弟姉妹の霊的な繋がりが、この世に浸透し、福音を土台とした社会になっていくことを願います。

今講筈から、奥田先生はイザヤ書に取り組みました。先生は、

「旧約聖書に取り組むことは冒険です。我々の仲間内では、新約聖書のイエス・キリストだけでいいと言えるのですが、聖書について世の中の人はいろいろなことを聞いてこられます。その時に、旧約聖書のことは何も知りません、ではどうにもならないのです。」

と話され、この世の人のために、旧約聖書も代表的なものは一通り知っておく必要があることを説明されました。

神の啓示を受けたイザヤは、神より遣わされた使者として、威厳と権威をもって神の言を伝えた。彼は約40年間預言者としての活動を続けた。

神は、儀礼的・偽善的な礼拝や祭り、捧げ物を忌み嫌い、社会正義（正しい裁きを求めること、搾取する者の横暴を許さないこと、孤児の権利が擁護されること、寡婦の訴えに耳を傾けること等）が行われることを望んでおられる。（イザヤ書1章10～17節）

政治であろうと経済であろうと、その他人間のあらゆる営みの中に、義の神の観念（考え）がなければいけないのではないか。つまり、その人の心の在り方として、義の神の考え方が必要ではないか。結局のところ、他人を言いくるめることはできても、神をごまかすことはできないのだから。

我々のように神を知る者は、自分の利益を社会に役立てるという角度で、

「日々の営み（仕事・生活その他）を通して、御心を地にならせてください」

という祈りを持って生きて行きたい。このような祈り心が社会に浸透していくことが我々の願い。

膨大な歴史書でもある聖書の上に、キリストが要として存在している。



ユダとエルサレムについての預言

——イザヤ書(2)——

2012年2月5日

聖書朗読 コリントの信徒への手紙Ⅱ4章16節～5章10節

集会の前に、奥田先生からY奥様が京大病院に入院され、やや重篤じゅうとくな状態にあるとお話がありました。しかし、先生は、一切を主の御手に委ね、Y奥様が主とともにあることを祈っていると、艱難の中にあつても主を信頼していることを告白されました。そして、聖書朗読にコリントの信徒への手紙Ⅱ4章16節～5章10節を選ばれ、次のように語られました。

「信仰とは、見えるところを超えて響いて来る言葉を受け取ることです。見えないもの、永遠なるものに目を注ぎ、向うからの光によって引き寄せられることです。向うの世界で輝くことができるので、主の御手に委ねるのです。」

「試練に出会ったときにこそ、キリストを受け取る。現状がどのように変化しようと、主とともにいることです。いかなる苦しみの中にあるときも、キリストが先に苦しみを受けておられることを考えるのです。キリストをこの世に送ってくださったこと自体が神の愛なのです。地上での生き方を通してキリストを深くいただき、キリストの命に飲み込まれていく人生を歩むことが我々の目標です。」

京都集会の礎いしづえを築かれたY奥様の上に、主の御加護と平安がありますようにお祈りください。



永遠の都

2012年2月12日

聖書朗読 ヘブル書10章32〜39節、11章13〜16節、13章14〜16節

1月半ばから入院中のO奥様の病状が重い。

「我らは如何に祈るべきかを知らざれども」

キリストの御霊による執り成しと、主の平安、支え、励ましを祈る。

昨日、奥田先生を講師として奈良キリスト召団主催のキリスト道講演会が開催された。本日の集会の始めに講演会に参加した兄弟数人が感謝の証言を行った。講演の題「試練の中の希望」は、昨年3月11日の東日本大震災以来、事ある毎に京都集会で取り上げたテーマである。病気、苦難、憂いなどの様々な試練の中で、真にキリストの^{もの}有と成るため、私達は天来の生命と愛をいただき支えの中にある。

奥田先生は今日の講筵で、新約聖書のパウロでさえ、時には力無きを嘆き、生きる望みを失ったと書いていると話された。またパウロが多くの試練の中で、

「我にとりて生きるはキリストなり」

「我ら生くるも主のため生き」

と、主と共に生きることを選び、苦難にも^{はたらき}労働にも眠らぬにも忍耐を重ね、主の御霊により「生ける者」、「多くの人を富ませる者」、「凡ての物を持つ者」となったと告白していると話された。先生は私達に、パウロが一切を主にあずけて苦難を乗り越えていった実体験があるからこそ、その言葉に「力」と「まことの慰め」と「胸を打つもの」があるのであり、皆さんもそうであつて欲しいと語られた。その他、ヘブル書、黙示録からも御言葉を学んだが、以下、ヘブル書の中から御言葉を拾う。

「汝ら神の御意^{みこころ}を行いて約束のものを受けん為に必要なるは忍耐なり。」

「彼らは……未だ約束の物を受けざりしが、遙かにこれを見て喜びの声を上げ、地にては旅人なるを言い表わせり。この故に主は彼らのために『永遠の都』を備え給えばなり。」（ヘブル書10章〜13章から、一部変更のうえ抜き書き）

先生は、最後に

「主は私達のために最善を為してください。一切は主の御手の中で貫かれていることを受け取っていききたい。」

と力強く語り、講筵を締めくくられた。集会の終わりに、病床や試練の中にある兄弟への祈りを捧げ、讃美歌352番「天なる喜び」を全身で歌い散会した。



インマヌエル

——イザヤ書(第3回) 7章14節——

2012年2月19日

聖書朗読 詩篇23篇、46篇

○姉妹の現在の状況を、奥田先生から知らせて頂きました。

奥田先生は、姉妹に対し、どんな状況であつてもキリストに心を向けていて欲しいと願つておられました。集会最後の祈りの時は、皆で姉妹のために、姉妹の内にキリストの御力と平安とがあるように、と祈らせて頂きました。

イザヤ書の講筵「インマヌエル」では、今回もイザヤ書の複雑に入り組んだ文章構造に悩まされる形となりました。分かったことは、素読で理解できるものでは到底ない、ということでした。しかし、奥田先生は、日本人のメンタリティーに合致した形の福音で、なおかつ知性に基づいた誰もが了解可能な聖書理解を目指しておられるので、こちらもしっかり学びたいと思いました。

「信なくば、立たず(信じなければ、持ちこたえられない)」(イザヤ7・9)

試練に遭つたら、ひたすら喜びとせよ……自業自得や身から出た錆という形での苦難ではなく、主にあつて生きている、あるいは、社会や人のために心を砕いて日々の営みを続けているなら、試練はその人を鍛え成長させるためのチャンス、より高い精神性を獲得できる(キリストに似た者にされていく)チャンスなので、試練は喜びとなる。

インマヌエル(イザヤ7・14)……「神は我等とともにある」の意。

イザヤ書における大事なことは、小池辰雄先生の著作集第10巻『聖書は大ドラマである』に書かれてある。これら先人の業績からも学び、イザヤ書のバックグラウンドと光っている箇所は理解しておきたい。

イザヤ書は旧約聖書の中でも特に厄介な文章構造(後の時代に新たに文章が挿入された等)のため、読み手に分かりやすい形では整理がされていない。だから、細かいところはこだわらないで、ポイントを押さえていきたい。

イザヤ書を明晰に理解することはできないし、その必要もない。

集会だよりの書き手として思うことは、日本の歴史書でも、原典は一筋縄では到底理解できないものであるとすれば、イスラエルの歴史書の原典である聖書が理解困難であることは仕方がないのではないか、ということ。



Y姉妹を天に送りて

2012年3月11日

聖書朗読 詩篇62篇1〜2、5〜12節

2月28日早朝、O奥様が天に旅立たれた。病状が重いことは聞いていたが、これほど早く召されるとは思っていなかった。前夜式、告別式は京都キリスト召団主催で行われ、司式は奥田昌道先生が務められた。司式者が喪主という異例の式だったが、それ故に司式者の言葉が参列者の胸を打ち、またY奥様の暖かいお人柄が集まった者の心を一つにして、深い悲しみの中にも主キリストの御名が讃えられた式となった。

本日の集会は、「O姉 前夜式・告別式の感謝集会」として、出席者の中から十数人が感話を行った。その内容の一端を紹介する。

Y奥様は、

① 終始一貫、奥田先生の良き同労者として伝道を支えられた。闘いの一生だったと思う。主様から「地上でよく働いた。もう私の元に来てもいいよ。」との言葉を掛けられ昇天したのだと思う。学生の頃から大変お世話になった。集会の母の死は、すごく悲しい。

② 雑談の名手だった。「北風と太陽」の話の中の太陽のような存在で、キリストの優しさを感じさせる多くのお話をしていただいた。そのお人柄に自分は癒された。

③ 奥田先生の霊の腕、霊の足として、変わらぬ信頼の姿勢を生涯にわたり貫かれた。

④ 私達を暖かく迎えてくださり、明るい性格の方でお話も楽しく、そのことで集会の居心地がとても良かった。「奥田昌道ファンクラブ会長」であり、また、良き妻、良きおばあちゃんだった。

最後に奥田先生から講筵をいただいた。先生は、前夜式、告別式で感じたこととして、日頃疎遠になっていた信仰の友が多数、集まってくくださったことをあげられた。また式で、京都キリスト召団のありのままの姿を告白出来て、参列した方が、

「素晴らしい証しの場だった」

と言ってくくださったことを紹介された。

先生は、Y奥様を天に送り、正直、祈れなかったこともあったと述懐されたが、集会の主にある兄弟姉妹の有難さを想うと述べられ、

「今日を新たな出発の日として、奥田も召団も前に向かって進んでいきたい。」と力強く語られた。

遠くYからH兄が集ってくくださり、また、新しく2名の婦人が参会された。



新生

2012年3月18日

聖書朗読 ヨハネ伝3章1～21節

奥田先生は、O姉が天に召されたことで、

「いよいよ天国の世界がリアルに感じられるようになってきた。私も早く向こうに行きたいが、この世での使命を果たし終えるまでは迎えてもらえない。だから、果たすべき使命を早く果たし終えることの邪魔はしないでください。」

と話されました。また、

「肉親への愛情だけでは、それに引きずられて駄目になっていたかも知れないが、集会に集う人たちのお蔭で、しつかり使命を果たさなければと気持ちを切り替えることができた。」

とも話されました。Y姉はこの世での使命を果たし終えたからこそ、向こうの世界（キリストの支配する永遠の喜びと生命力に溢れた世界）に召されたに違いありません。私たちは、この世に生き、この世での対人関係や生活、やるべき仕事を決断していい加減に考える者ではありませんが、この世での使命を果たし終えたら、走るべき道のりを走り終えたら、キリストや親しい兄弟姉妹が「よくやった！」と大歓迎してくださるからこそ、その希望を指してキリスト第一で生きて行くのだと思います。

今しばらくの間の講筵は、先生が聖書の中で最も感銘を受けている個所を中心に、キリストに導かれるままに語られる予定です。この日は、ヨハネ伝3章を中心に天国の奥義を伝えてくださった他、先生が家庭集会を始められた40才のころに書かれた文章（今の集会日より当たる）を紹介され、若かりし頃の知性と理性と情熱に溢れた先生の考え方や生き様を伝えてくださいました。本質的に今と何ら変わらない、人とキリストへの誠実で実直な姿がそこにありました。

イエスはお答えになった。

「真実をあなたに話そう。誰でも、神からの恵みによって、神に新たに生んで

もらわなければ、神の国には入れない。」（ヨハネ3・5）

神の恵みにより、新創造されなければ、永遠に続く喜びと生命力溢れる世界には入れない。

「神は、その独り子キリストをお遣わしになった程に、世を愛された。それは、

独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子キリストを世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世

が救われるためである。」（ヨハネ3・16～17）



聖霊の力により

2012年3月25日

聖書朗読 ロマ書8章31～39節

奥田幸子奥様が天に召されてから4度目の聖日が巡ってきました。奥田先生は、先週の御講筵を「新生」と題され、此の世の次元の悲しみに止まるのではなく、主様の霊の次元にいいよ熱く心身を投げ入れる姿を見せられました。私達も、主キリストの血潮と霊を受け、水と霊による新生の道に歩を進めたいと思います。

本日の御講筵では、ヨハネ伝福音書第4章第23節の

“by the power of God's Spirit”

「霊と真をもて(文語訳) ↓ 神の霊の力により」(アメリカ today's English version)

という受けとりによつて、愛なるキリストの聖霊の御力が私達に満ちて、ひとりびとりも集会も前進させられることを、溢れるように先生は語られました。天地呼応して、愛なるキリスト様と私達一人一人が引き裂かれ得ない、一切をのり超える生命体を形成していることを証しようではありませんか。



愛は断じて滅びない

2012年4月15日

聖書朗読 ヨハネ伝10章1～39節

大津から京都へ至る道すがら、あちらでもこちらでも満開の桜が目に入る。桜がこんな
に沢山あったかなと、この時期になると驚かされる。

先週の復活節集会は午前の「愛の命」と題する講筵で、キリストの十字架、復活、聖霊
の生命にあずかり、午後の「O姉妹記念感話会」では、Y奥様にお世話になった多くの兄
弟姉妹から、心温まる証言をいただいた。最後の祈祷会では、ヨハネ第1書から御言葉を
賜り、

「愛する者よ、われら互いに相愛すべし。愛は神より出づ。」

と、キリストにおいて顕れし神の愛を学んだ。会場に置かれたY奥様の微笑む写真の周り
には、春の花をいっぱいに使った3つのフラワーアレンジメントが飾られた。

本日の講筵で最初に讃美歌271番「いさおなき我を」を歌った。奥田先生は、

「いさおなき我を 血をもて贖い、イエス招き給う」

「このころの痛手に 悩めるこの身を イエス医し給う」

「たよりゆく者に 救いといのちを イエス誓い給う」

と、いずれも主様の業が先であることを深く受け取りたいと話された。

講筵では、ヨハネ伝10章とコリント前書13章等から御言葉をいただいた。奥田先生は次
のように語られた。

「私達は、主に贖われた者として十字架の門を通って安んじて『生命の源』に入ら
せていただく。主キリストがこの世に来られたのは、その生命を私達が豊かに受
けるためです。主は私達に、主が父なる神と一つであったように、あなたも私（キ
リスト）と一つだよと言っておられる。これを本当に受け取ったら『さかな君』の
ように『ギョギョ!』と驚く事態ですよ。」

コリント前書13章では、

「愛を源泉とする信、望、忍耐は、ギブアップすることなくどこまでもその人を貫き、
その愛は断じて滅びない。天にある者も地にある者も一つにされており、天国で
互いに再会するとき、そのことをはつきり知ることになる。したがって地上にあ
る皆さんは、この聖書を生命の書として受け取り、天下一品とされていることを自
覚し、常に主様をいただいて進んでください。」

と語られた。桜では花と葉が同時に出る山桜が好きだ。普段は他の木々に隠れて目立たな
いが、花を付けると慎ましくて優美な姿に輝く。山桜なる召団の皆様の平安を祈る。



森下一男兄を天に送りて

2012年5月13日

聖書朗読 ヘブル書11章1～16節

5月第2日曜は「母の日」、集会の母なき母の日の集会を初めて迎えました。それは御国に生きておられる奥様の眼差しの注がれている集会です。

本日の集会は、奥田先生の御講筵の題が示すとおり、森下一男兄が天に召されことを記念する集会でもありました。奥田先生は、告別前夜式、告別式そして本日の聖日集会を貫いて、主様に平伏して聖霊を受け、伝道の前線で「ともしび」となり続けた「勇者」を天に送ったというトーンを響かせられました。ヘブル書11章、12章またコリント後書4章、5章により、信を抱き貫いた者を主様は喜び給うことを、溢れるように先生は語られました。ヘブル書11章13～16節が痛切に魂に刻み込まれました。

次の聖日の午後、奥様の納骨式が行われます。覚え、祈ってください。



いかなる時にも神により頼め、聖前に心を注ぎ出せ

2012年5月20日

聖書朗読 詩篇62篇1～2、5～12節

笑顔で私達を出迎えてくださった人の顔が見えない。朗々とした聖書朗読の声が聞けない。万歳を唱えて天に送った信友であるものの、一人静かに想うと「さびしみ」が訪れる。本日の集会の証言でM姉から、夫君に関するリハビリの御様子、快復の状況、召天直前のこと等をうかがうことが出来た。私は今でも、目を閉じるとM兄の『ありがとう』の声が聞こえるような気がする。

講筵では、初めに、同じく最愛の奥様を天に送られた奥田先生から、最近、詩篇62篇の御言葉を通し、自分の霊（たましひ）が「ゆだねること」・「御言葉に信頼すること」に導かれた消息をお話いただいた。後に続く私達にとって、貴重な証言であると思うので、以下に要旨を記載する。

「主キリストは奥田のうめきも寂しさも全てご存知である。全ては主の御手の内にある。その上で主は、病と闘うY姉を天に引き上げられたのだ。そのことをここ2、3日の内に心の中にスーと受け取れるようになった。神の思いは人の思いとは異なる、しかも、すばらしい方向で異なる。そのことに信頼し、全てをご存知の主様に静かに委ねて行こう。主は最善を成してくださる。

『涙していいよ、しかしそこに溺れこんではいけない。大丈夫、ひるむなかれ』と主は私を励ましてくださった。」

このキリストの励ましで奥田先生の霊に火を付け、『やったるで』の盛んなる意気が沸き上がってきたとのことである。そして先生は、私達一人一人に対し

「民よ、いかなる時にも神により頼め」

の御言葉どおり、どんな状況にあつても揺るがずに主に信頼し、主に全托することの大切さを強調された。

また、ピリピ書から、私達集会に連なる者に対しても、

「キリストの福音に相応しく日を過ぐすこと、愛を同じくし心を合わせ、キリストの喜びを充たすような心がけること。」

など、僕^{しもべ}の心を忘れないようにと導いていただいた。

午後から、O姉の納骨式のため京都召団及び奈良召団の有志が集い、京都西山霊園の墓前にて祈りを合わせ、全員が献花の代わりにY姉の遺影に感謝の言葉を語りかけた。I君がお母さんと介助の方と共に元氣に参加してくださり、Y奥様もお喜びだった。



キリストの弟子たるの道

2012年6月3日

聖書朗読 マルコ福音書8章27節～9章13節

〇姉が天に召されて、淋しく苦しい思いをされていた奥田先生は、苦しみ悶える胸の内をキリストに注ぎ出すことで、

「人の思いと神の思いは異なる。それも素晴らしい方向に異なる」

という心境に達せられました。先生は、後に続く者に、キリストとの関わり方や、神の御心には人の思いを超えた深さや厳粛さ、素晴らしさがあることを、身をもって教えてくださいました。先生の願いは、

「二人一人が個別の人格を保ちながら、人間として全うな生涯を送るために、キリストによってそれぞれに仕立て上げてもらうこと」

で、我々自身が自らの判断によってキリストに委ねる者になっていくことです。

「キリストの弟子たるの道」と題した御講筵では、

「キリストに従っていくことは、生易しいことではない、何故なら、キリストの弟子である者の戦いは、血肉に対するものではなく、闇の世の主権者、天上の悪の霊に対する戦いだから（エペソ書6・12）」

との主旨が語られました。

神なき、ゆがんだ時代に、世の人に合わせて、キリストのことを恥とする者は、キリストに相應しくない。（マルコ8・38）

闇の世の主権者との戦いは避けて通れないが、キリストに命を差し出していけば、ベテイー・イーディーさんの本にある通り、主と天使達が力をくださる。

キリストの十字架の試練に比べれば、我々の試練は知れている。

キリストに従いたい者は、我を忘れて（夢中になって）、自分に与えられた試練を担って、キリストに従っていく。（マルコ8・34）

神の霊と、この世の霊のどちらを選ぶのかが問われる。主についてきて良かったと喜んでいる姿が、人を惹きつける。

神の霊による誕生（ヨハネ3章）は一瞬にして生ずるが、そこからの霊の成長には年月と忍耐が必要になる。一足飛びにはいかない。

神様は、御子キリストを通して語られる。（マルコ9・7、ヘブル書1・2）

洗礼者ヨハネはヘロデの保身のために、キリストは宗教権力者の保身のために犠牲になった。我々は、この世が神なき世であれば、この世の権力からも、この世の世俗的宗教からも、捨てられることを覚悟しなければいけない。



キリストの弟子たちの道 (続)

2012年6月10日

聖書朗読 マルコ伝9章30〜37節、10章13〜16節

梅雨に入り、集会場の窓から見える鴨川の水量が少し増え、脚をつけている小鷺も涼を楽しんでいるようにうつります。集会は、復活節、聖霊降臨節を過ぎ、夏の特別集会に向かう時期に入りました。奥田先生の強調される「日常生活の中での信」、各人の足が歩まされる信の日々が問われる時期です。

本日の御講筵は、先週に続き、「キリストの弟子たるの道」(続)と題され、マルコ伝福音書から主様の御相と弟子達また主様の出会われた民のありさまが描き出されました。山上の変貌の後、主様はメシヤであることと受難と復活とを告知され、また、幼な児を抱き、手を置いて

「神の国は斯くの如き者の国」

と言われました。罪なき神の御子が受難の路に入り給うた時に、罪と不義を帯びた人の中にも幼な児を見、深い慈しみを投げかけ給うたのだと思いました。



生命を保つ道

2012年6月17日

聖書朗読 マルコ伝10章17〜31節

梅雨の雨が上がり、大地も草花もしつとりと濡れている。雨上がりの静かな聖日、キリストに帰る日である。

本日の集会は、先週に引き続きマルコ伝10章から御言葉をいただいた。ただ、今日の聖書の箇所はやや難解で、私自身十分そしゃく出来たとは言えない。

奥田先生は、今日の聖書朗読の箇所に関して、「救い」とか、「永遠の生命」を得る道について、福音書を「生で」^{なま}読んだだけでは混乱を来す事があること、私たちは主キリストの十字架の贖いのゆえに既に永遠の生命（救い）を戴いてしまっているのに対し、福音書では、これからどうすれば「救い（永遠の生命）」が得られるかが問題とされている（律法を完全に行う以外になかった）。この違いをはっきりと自覚していないと、私たちも「救い以前の律法的生き方」に舞い戻ってしまう。だから聖書を読むに当たり「正しい導き手」が必要だ。その導き手の役目をするのが「神学」であって、信仰の内容・在り方に方向付けをする羅針盤の役目をするものが「神学」なのだと言われた。また、先生は「導き手」の実例として、小池辰雄先生や内村鑑三先生を引かれ、特に小池先生が私達に、「十字架、聖霊一如」の事態を繰り返し語られたことを紹介くださった。小池先生は、長年にわたる深い祈りの中から、マタイ伝5章3節の御言葉が、

「恵福なるかな、汝、わが十字架によって既に靈貧しくされてある者よ、復活の我、聖霊の我、汝の中にあり。」

と響いてきて、これが福音書を読み解く鍵となったとのことである。

奥田先生は、主キリストが十字架で一人一人を完全にあがないきつてくださっている事実を全身で受け取ること、ガラテヤ書2章20節のパウロの告白に徹し、これを祈りの根底に据えることの大事さを熱く語られた。最後に詩篇第1篇から、主キリストによって靈貧しくされた私達は、

「主キリストをよろこびて、日^{ひる}も夜もこれを想う」

が故に、

「期^{とき}に至りて実を結び、……その為すところ皆さかえん」

と祝福されていると。

主は、今日も明日も次の日も進み給う。今日の講筵で引用された小池辰雄著作集の『無者キリスト』、『無の神学』、内村鑑三の『求安録』の各再読など、私達キリストの信をいだいた者の学ぶべき課題は多い。



イエスの福音

2012年6月24日

聖書朗読 マタイ伝4章12〜25節

梅雨の晴れ間の聖日集会は、マタイ、マルコ福音書を中心に主の御言葉をいただきました。
イエスは、神の国の到来という終末の迫りのなかで、

「時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて（心を翻して）福音を信ぜよ」

と呼びかけられました。イエス自身が「神の国（天国）」の体現者であり、全的に求めてくる者にはその願いに無条件に応えておられます。それを記述した福音書は神のドラマです。私たちはその劇中の人物になって聖書を読まないで、聖書を読んだことにはなりません。福音書において、イエスは、癒しなど多くの徴を現されました。しかし、大事なものは、癒しがあるかないかではありません。私に全托するなら全責任を負うという、もつと深い救いなのです。癒しは、それを通して根源的な救いに至るためのものに他なりません。

我々の信仰は一時的なものであつてはならない。大河となつて滔々と未来へ流れて行く信仰を確立することが大事です。そのためには、聖書をしつかりと体得し、世に向かって自分たちの在り方を言葉で語り伝える必要があります。そして、何が来ても、微動だにしない確固たる生き方をすることが真の勝利の道です。

キリストの言葉を道標として日々の祈りを積み重ねると、知らない間に変貌して行きます。神の子が成長するには、長い年月がかかります。苦難を通して霊的に成長して行くのです。それには、聖霊の宿る集会に一人一人が祈りを通して繋がることです。



汝ら之に聴け

2012年7月1日

聖書朗読 マタイ伝17章1～8節

梅雨の中、この日の集会も兄弟姉妹が集まり、祈りを共にしました。また、夏の特別集会の案内も配られ、奥田先生は、

「夏の特別集会は、キリストを知らない人のための福音伝道集会ではなく、キリストを熱心に求める者たちのためのものです。この時ばかりは、日常を離れて、高野山の修行僧に負けない程の真剣さで、キリスト（の聖霊）漬けになりましょう」と呼びかけられました。

打算や虚栄とは無縁の、キリストだけが讃美される福音が語られ、一人一人の兄弟姉妹が大事にされ、互いにキリストの愛をもって助け合い強く結び合わされたこの召団には、本物の福音（この世での生命や肉体の他、あらゆる物が滅んでも、霊の生命は、キリストによって自由に本当に永遠に生かされること）を世に伝える使命があると思います。人々の心が、キリストの霊によって、この世の霊による恐怖心から自由にされ、主を讃美できる日が来ますように。

「汝ら之に聴け」と題した講筵では、

「キリストの十字架と復活の後の現在は、我々はキリストの聖霊に聴く。聖霊が福音書を解き明かしてくださる。聖霊は我々の心に平安をくださる。（ヨハネ14・26

～27、ヨハネ16・13）」

との趣旨が語られました。

聖書は、昆布だしのように、自分の中でジワッとにじみ出てくるような読み方をする。昆布が固いままであるような、義理で読む読み方じゃダメ。

福音書は、生命を与えるためのもの。だから、そのように咀嚼していく。

肉体や全ての物はいつか滅びる。医学の進歩など人類として出来ることはすれば良いが、同時に人間としての限界も知り、死んでも死なない永遠の生命を頂いていることを、クリスチャンは生き方を通して告白していく。

我等は、御国とこの世の両方に軸足を置いている。この世のことだけを考えて生きる人とは、一線を画す。

福音書は、当時は、キリストによる御国の希望が語られた約束の書であったが、キリストの十字架・復活・聖霊以後の現在は、キリストが語られた福音は全て成就したものとして読む。

全て（試練も苦しみも）を、霊の成長の糧として、感謝して受け取って行く。



隅の首石、霊の家

2012年7月8日

聖書朗読 ペテロ前書1章3～25節

今日は7月8日、1956年の今日、奥田先生は初めてのキリスト教の聖日集会に参集され、キリスト信徒とられた日であること、56年後、曜日の廻りが同じになったことが、御講筵の冒頭に話されました。私達の魂の救済がこの集会の中でもたらされたことに思いを致し、厳粛な、背筋を正さしめられる一刻をもちました。

御講筵は、「隅^{すみ}の首石^{おやし}、霊の家」と題され、ペテロ前書1、2章を引いて、主の御霊の愛が溢れるように語られました。聖書の御言の引用される箇所が連なり響くとき、御言の中から御霊が流れとなつてほとばしり、私達に降り注がれるのが判るような集会でした。主様と御霊のダイナミックな一体またその働きかけに吞まれ、私達も永遠の生命をもつことを知らしめられ、祈りを与えられ、熱くされました。



超絶・全能・全智の神

2012年9月2日

聖書朗読 イザヤ書40章9～17節、27～31節

夏季特別集会(京都・くに荘)の、文字どおり特別な三日間が終わってから一週間、月が変わって秋9月に入りました。一人びとりの生活の場に戻って、特別集会で受けた贖いの御霊の火を燃やし続けていきましょう。

秋の御講筵は、第二イザヤの預言書(イザヤ書40～55章)をあらためて読みなおすというシリーズによって始まりました。私達は、主様の十字架による贖いを通して、誰に責められようとも、罪を赦されています。その主様の背後には、無相にして、民に語りかけ、働きかけ、待ち望む者に希望と力を与えようと、熱く燃え給う神様がおられます。主様は、世から顧みられなかった一個の絶望の魂に、自ら近づき、み言をかけ給い、信をもたせ給うた御実存でありました。旧約と新約をこの秋に受け直し、祈り、働きましょう。



イザヤ書の背景と周辺

――列王記下、歴代誌下より（第1回）――

2012年9月9日

聖書朗読 イザヤ書30章1～22節

9月の声を聞いたが、まだまだ日中は残暑が厳しい。それでも夜になると虫の音がにぎやかだ。小さい秋が感じられる。

2012年夏季福音特別集会を終え、京都でも各自が新しい歩みに向かって進み始めた。この特別集会でいただいた講筵資料及び聖書に関する抜粋は、私達が真にイエス・キリストの有^{もの}とされるためのエッセンスがまとめられており、熟読し、時にメモをとりながら繰り返し味わい、私達の血肉となるよう大いに使いたい。

京都集会ではこの秋から、新たにイザヤ書に取り組むこととなった。イザヤ書のバックグラウンドを少しでも理解し、旧約聖書の大事な箇所を正しく受け取りたいとの願いが込められている。なお、小池先生は『聖書は大ドラマである』の著作の中で（6月11日）、

「イザヤ書全66章は、旧新約聖書全66巻の縮図の如き大預言書」と書かれている。

今日の講筵では、「列王記下」及び「歴代誌下」に目を通しつつ、奥田先生に用意して頂いた聖書辞典からの「年代表」及び必要部分を抜き出したプリントを頼りに、イザヤ書の書かれた時代背景に取り組んだ。その詳細をここに記載することはしないが、本日朗読したイザヤ書30章にとっても恵み深い御言葉があるのでこれを記載したい。

「主エホバ、イスラエルの聖者かく言いたまえり。なんじら立ちかえりて静かにせば救を得、^{おだやか}平穩^{よりのたの}にして依頼^{よりたの}まば力をうべし。」

「主はなんじらに、悩みの（時に）糧と、苦しみの（時に）水とを与え給わん。」
「なんじ右にゆくも左にゆくも、その耳にこれは道なりこれを歩むべしと後^{うしろ}辺にて語るを聞かん。」

祈りの秋を前にして、大預言書であるイザヤ書への挑戦が始まった。時に湧き水にのどを潤しながら、高き峰を目指して一步一步確実に進んでいきたい。



ヨシヤ王の宗教改革

——列王記(下)、歴代誌(下)より(第2回)——

2012年9月16日

聖書朗読 詩篇33篇

国内外とも、様々な問題に次ぐ問題が起きていますが、こんな時こそ静かに、聖書やキリストの御言葉に触れることによって、霊肉共に主の知恵と力を頂き、この世での確かな歩みをすることが大事かと思います。

奥田先生は、旧約聖書に親しみ、イザヤ書やエレミヤ書などの預言者たちの、また詩篇の作者たちの、主への祈りや呻きをより実感をもつて味わうために、当時の王たちの治政の有り様が描かれた列王記(下)や歴代誌(下)を通して、当時の社会状況を理解しようと苦闘しておられます。聖書をより霊的に深く受け取るためには、避けて通れない苦勞であり、苦勞無くして本当の喜びには至れないということで、覚悟を決めて聖書と取組むしかないと思いました。

マナセ王(紀元前687～642年)は、ベン・ヒノムの谷で自分の子らに火の中を通らせたり、占い、魔法、まじないをするなど、主の目の前に悪を行つた。主は警告を発せられたが、マナセは心に留めなかったために、主は敵を通してマナセを悩まされた。しかし、その事によってマナセは主に立ち帰つたので、主は彼の祈りを受け入れられた。(歴代誌下33章)

ヨシヤ王(紀元前640～609年)は、主が良いと見られることをなし、父祖ダビデ(理想的な王であつた)の道を歩んで、右にも左にも曲がらなかった。彼は、父祖ダビデの神を求めることを始め、ユダとエルサレムの他、イスラエル各地の偶像や他の神々の祭壇を打ち壊すなど、イスラエル全国を清めた。彼は、主の宮で発見されたモーセによる主の律法の前に悔い改め、己を低くしたために、主は災いを遠ざけられた。ヨシヤは民にもモーセの律法を伝え、

「心を尽くし、精神を尽くして、この契約の言葉を行おう」

と呼びかけ、民はヨシヤの存命中は主に従つて離れなかった。(歴代誌下34章)

主は、特愛のイスラエル民族の為政者である王が、主を捨てて他の神々に仕えた場合、こつぴどく懲らしめられるが、悔い改めて主に立ち帰るならば、豊かに赦しておられる。主は、我々が過ちを犯した場合には、懲らしめによって、我々に主の恵みと御心を理解させ、主に立ち帰ることを求められる。



民の二つの悪

——エレミヤ書(第2回) 2章～7章——

2012年9月30日

聖書朗読 エレミヤ書第7章1～11、16～28節

台風が近づいており、朝から雨。鴨川べりも人通りが少なく静かな聖日を迎えた。鴨川温泉キリストの湯に、今日も主にある兄弟が集う。

本日の集会では、エレミヤ書1章から7章の御言葉を学んだ。エレミヤは背信の民に向かい繰り返し警告し、

「主の言葉を聞け」、「わたしに立ち帰れ」

と呼びかける。しかし民は受け入れず立ち帰ることをしない。奥田先生は集会の始めに「日本の知識人の中に、キリストの御言葉さえ聴こうとしない人がある。聖書に本気で取り組んで、聖書をこの国のバックボーンにしたいと言う人がいない。誠に残念です。」

と心中を語られた。そして私達集会員に対し、

「皆さん、そのような角度でエレミヤ書を読んでください。」

と話された。

本日の講筵で特に印象に残ったエレミヤ書の御言葉を以下に記載する。

「^{みづため}そはわが民は二つの悪事を犯せり。即ち生命の水の源なる我を棄て、自ら^{みづため}水溜を掘れり。即ち崩れたる水溜にして水を保ち得ざるなり。」(エレミヤ書2

章13節。小池辰雄著『聖書は大ドラマである』7月1日から抜粋)

この箇所につき奥田先生は、概略次のように話された。

「^い活ける真の神様に従っていないと神様を棄てる。そして自分勝手なことを行う。活ける水^いの源なる神様からの霊の水をいただいてこそ、人間は本当に生きた人となるのです。自分で水溜を掘っても、その水は人を活^いかす霊の生命を養うことはできないのです。」

また、奥田先生は、人は根底から造り替えられなければならない存在であり、このどうしようもない人の罪を全部キリストがひつかぶって、その背きを十字架で滅ぼし、その上で聖霊をくださった。この絶大なキリストの推進力に身を委ねて、身も心もキリストと一つになることです、とも語られた。

旧約聖書の学びはまだ始まったばかり。私達は聖書の深い真理を学ぶため、旧約の細い路^{みち}を歩む。その路も主キリストが導いてくださる。



ユダ王国の滅亡とエレミヤ

――列王記下・歴代誌下（第3回）――

2012年9月23日

聖書朗読 エレミヤ書17章5～18節

猛暑も一段落して秋を感じさせる日曜日でした。今日は、列王記（下）、歴代誌（下）を復習しながら、詩的な表現で書かれた祈りの書であるエレミヤ書へとご講筵をつないで行かれました。

ご講筵の冒頭で、先生が一日一日を命がけで生きていますかと問いかけられたことが、強く印象に残りました。

旧約聖書は、イスラエルの歴史の書であり、難解で不完全な個所も多いですが、その中で光っているものを取り出して把握することが正しい読み方であると教えられました。これは、旧約聖書を新約聖書の光で読むことを意味するものと思います。

エレミヤ書は、エレミヤが新約聖書における主様の先駆けとして登場していることを現しています。エレミヤは、主様と同じように、自分に死んでひたすら神に寄り頼む人生を求めて生きました。

我々も主様にしっかりと繋がっていると、この世にあつて負えないような重荷や苦難が与えられたときも、

「彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて必ず救い出す」（エレミヤ1章8節）

との御言葉が臨んで、苦難の場にあつて強められ、希望が湧いてくるのです。我々には知恵、力、才能などがなくても、主は、

「見よ、わたしはあなたの口にわたしの言葉を授ける。見よ、今日、あなたに

権威を委ねる」（エレミヤ1章9節）

と、我々の内からは出ない不思議な力、戦う力をくださるのです。

主への信頼が深まるほど、1章5節のように、生まれる以前から主の御計画の中に抱かれ、守られていることが実感できるのです。



涙の泉

——エレミヤ書（第3回） 8章～10章——

2012年10月7日

聖書朗読 エレミヤ書9章1～3、23～24節

昨年の大震災の原子力発電所の事故以降、私は地球環境やそこに生きる人類の危機的状況に強い関心を抱くようになりました。人類が環境を汚染することは、地球に対する罪であると言われています。罪の報いは死です。人類が力を合わせて問題解決を計ることは大事ですが、絶対的に死から我等を救い出してくださるのは、主の十字架による罪の赦しと聖霊による生命力の授与の他にないと思います。

奥田先生の御講筵の内容を以下に記します。

預言者エレミヤは、滅びゆく母国イスラエルを想って全身を涙にして神に祈る人であった。しかし、この世のあらゆる悲しみ苦しみをご存知の主は、ことごとく我等の涙を拭われる。人をどん底から救う実力を持つているのは、キリストの聖霊である。この世や自分の現実が、現象的には変わらないとしても、主の十字架による我等一切の担いと聖霊の御愛に満たされれば、主の義と愛の生命力をもつて力強く歩んでいける。そして、世のため人のために働くこともできる。（小池辰雄主筆「ハレルヤ」誌第36号より）

こうのと、山鳩、つばめ、鶴などでも季節の変わり目に移住するときを守るが、エルサレムの民は、自分の変節と裏切りに固執し、主の掟を知ろうともしない。（エレミヤ8・7）

彼らは手軽に、民の傷をいやし、平和がないのに、「平和、平和」と言っている。（エレミヤ8・11）

主が集めようと思うとき、ぶどうの木にぶどうはなく、いちじくの木にいちじくはなく、葉さえしぼんでいる。主の律法に従って豊かな実りを結んでいる者がいない。（エレミヤ8・13）

自分の知恵・能力・富を、自分のものだとかうってはならない。誇る（讃美する）者は、地に慈しみと公平と正義を行っている主を知っていることを誇り（讃美）とせよ。そのような人を、主は喜ばれる。（エレミヤ9・23～24）

キリストの祈りは、天の父へのひれ伏し、砕けの姿。（マタイ6・6）



エレミヤの嘆きと祈り

——エレミヤ書(4)——

2012年10月28日

聖書朗読 エレミヤ書11章1～17節

秋雨ものともせず、集会場がいつぱいになりました。奥田先生が、一時外出を許可されて、病室から帰宅され、順調な術後の回復の様子を私達集会員も眼にして、主様の御護りを具体的に感じることができました。先生の外出許可時間という制約があり、短い集会でしたが、感謝と讃美が集会場に満ち、まっすぐ主様へと上っていききました。

御講筵はエレミヤ書(4)「エレミヤの嘆きと祈り」と題され、11章～20章のエレミヤの預言の嘆きと祈りが、流れとなつて、聴く者の耳におし寄せました。燃えさかり、煮えたぎる悲歎と愛着。そして、主様の贖いによつて私達は既に主の民にされているという、原点を、先生から示されました。エレミヤをこんなに生々しく聴き、そして、今ひとたび、主様の血潮による御贖いを彫り込まれる思いがしました。



エレミヤ書前半のまとめ

— 20章〜25章 —

2012年11月4日

聖書朗読 エレミヤ書36章

奥田先生は、今までと何ら変わらない元氣なお姿で集会を持たれました。今回の先生の手術は、使命を与えたからにはそれを果たすまで守り抜く、福音を伝える使命を託した以上は病気にはさせない、私は言葉に責任を持つ神であると主の熱意を示されたものと受けとめました。その背後には、未熟な我々に対し、先生のお元氣な間に、福音の神髄をしっかりと体得せよという主の深い御思いが感じました。

先生は、旧約聖書は難しいが、後に続く人たちのために挑戦していると言われ、エレミヤ書を通して知することは、旧約においては、生ける水の源である主を捨てたことに対する厳しい裁きがあるが、主は裁きを通して、根底から立ち帰る者に救いの手を差し伸べておられる。翻って見るに、日本人は、生命の根源なるものを真剣に探し求めているか。何が来ても動じない絶対なるものを持つているかと、熱い思いを告白されました。

我々の原点は、キリストご自身です。キリストの歩まれたように歩ませてください。結果がどうなるのかという人の判断は問題ではありません。主様は全てを引き受けてくださいます。讃美歌354番（「かいぬしわが主よ」）のように、主様、私を正しい道に導いてください。この祈りを持って歩んで行くと、おのずから道は開けて行きます。このような生命の源である主様を本気で求めてください。



エレミヤの生命がけの預言と希望の預言

——エレミヤ書(第6回) 26章～31章——

2012年11月11日

聖書朗読 エレミヤ書29章10～14節、30章18～22節、31章1～6節

秋の気配が濃くなり樹木が色づいてきた。照り映える「もみじ」、「桜」、「檲」などの葉が、養分を作り出していた働きを終えて土に帰っていく。一年が早い。

エレミヤ書も6回目となった。奥田先生から分かり易く解説を加えて頂き、聴く私達はエレミヤの心を少しでも血肉としたい。今日、奥田先生は、「聖書の御言葉」に毎日触れるための一つの勧めとして、小池辰雄先生の「キリスト告白録」を少しづつ読んでいることを語られた。私自身、「時間が無い」と言い訳しがちな日々の中で、御言葉を喰らい、飲む時間をもっと大事にしなければと思う。

今日の講筵で奥田先生が大事な箇所と話された4つの所を、文語訳で味わいたい。

①「汝ら、もし一心をもて我を求めなば、我に尋ね会わん」(エレミヤ書29章13節)

②「誰かその生命をかけて我に近づくものあらんやとエホバ言う。汝らは我が民となり、我は汝らの神とならん。」(同30章21～22節)

③「我限りなき愛をもて汝を愛せり、故にわれたえず汝を恵むなり。」(同31章3節)

④「我、イスラエルの家とユダの家とに新しき契約を立つる日きたらん。この契約は、我が彼らの先祖の手をとりてエジプトの地よりこれを導きいだせし日に立てし所の如きにあらず……。我、わが律法を彼らの裏に置き、その心の上に録さん。……エホバ言い給う、我彼らの不義を赦し、その罪をまた思わざるべし。」(同31章31～34)

小池辰雄先生は『聖書は大ドラマである』7月18日の中で、④の箇所を、「これが有名な、画期的な、エレミヤに告げられたエホバの新契約で、新約聖書のキリストの福音への橋渡しの如きものである。」

と解説しておられる。

「なんじの聖言は、わが足の燈火、わが路の光なり」(詩篇119篇105節)

文語は響きが良い。これらの御言葉を私の心の糧として蓄えたい。



主の限りなき愛と新しい契約

——エレミヤ書(第7回) 31章～33章——

2012年11月18日

聖書朗読 ヘブル書8章6～13節

来月、衆議院の選挙が行われます。沖縄の基地の問題、原発の問題、外交など関心は高いですが、日本の政治のレベルの低さは、日本の民主主義が全く成熟していないことの表れだと思います。これまでのような、己の利益のみを声高に叫ぶ自己主張や、あるいは、誰かが何とかしてくれるといった人任せの体質では、もうどうにもならないと思います。

奥田先生の旧約聖書の講筵は、文語訳・口語訳・新共同訳聖書の比較検討と、旧約聖書略解や聖書辞典に基づいて行われています。史実や聖書研究の成果に基づいているので、より正確に聖書の内容を理解することが出来ます。ただ、聖書の本当の面白さは、神が預言者やキリストや使徒達を通して人間世界に切り込んでくる聖霊のドラマが鮮やかに描かれている点であり、そのことをよく理解されている先生の講筵は、その意味で決して聖霊拔きの退屈な聖書研究会ではありません。人に聖書における神の御心や福音の豊かさを正しく面白く伝えようとすれば、先生ほどの真摯な姿勢をもって聖書を読まざるを得ないのだらうと思います。どんなことでも、学び始めは大変だけれど、一旦分かり始めたり出来始めたりすると、それまでに蓄積された色んな知識や経験が繋がって来て段々面白くなってくるのと同じように、聖書の学びもきつと人生を豊かにしてくれる、楽しく価値ある営みの中の重要な一つになることを願います。

講筵の中で先生が強調されたと感じたことは、エレミヤ書31章31～34節を引いての解説で、

「外的規範（モーセの律法）を満たし得ない人間は、神が人の心に律法を記したとしても、かえって良心にさいなまれるので、いつ律法を破ってしまうだろうという不安が続く。その点、キリストの御霊の法則には心に平安がある。だから、キリストに繋がって平伏していることが重要。（御霊の法則（聖霊）の前提は、キリストが十字架において我等の神への背きの心を赦してくださったからなので）十字架の主の前に碎けの心でいることが重要。」

と語られた点です。我々が神の法則に心から従うことが出来るためには、神と我等との仲介者である大祭司キリストの霊がどうしても必要になるということです。



エホヤキムとゼデキヤの治世のもとでのエレミヤの経験

——エレミヤ書(第8回) 34章～35章——

2012年11月25日

聖書朗読 ピリピ書3章

今日は早朝から太陽がやわらかく輝き、紅葉が実に鮮やかに見える。行楽地では多くの人が去りゆく秋を胸に焼き付けている。それでも鴨川には都鳥が遊ぶ季節となった。

本日の聖書朗読は、久しぶりに新約のピリピ書を読んだ。やはり新約は親しんでいるせいか心にスーと入ってくる。講筵の始めに奥田先生から、ピリピ書を朗読した理由をうかがった。来年2月9日(土) 奈良キリスト召団主催でキリスト道講演会が開催されるが、先生はその主題を、「イエス・キリスト——この素晴らしい宝を!——」と決められた。先生は、パウロがピリピの兄弟姉妹に心を込めて書いたピリピ書を深く読まれ、閃くようにその主題が示された様子だった。まことに、私達が世の人々に伝えるべきものは、霊的人格「主イエス・キリスト様」そのものである。先生は、30分ばかりピリピ書のエッセンスを話してくださったが、パウロの語り口と先生の語り口が重なり、

「キリストを伝えずんば止まじ」

の心意気が伝わってきた。以下の御言葉のとおりである。

「今も常のごとくいささかも臆することなく、生くるにも死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給わんことを切に願ひ、……。我にとりて、生

くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。」(ピリピ書第1章20～21節)

ところでエレミヤ書は8回目を迎えた。難解である。しかし、語る者はもつと大変だ。講筵準備のため一杯書き込みをされた先生のノートが見える。今日、先生から

「整理しつつ、自分でノートに筆記しながら聖書を読むことの大事さ」

を改めて教えていただいた。せめて聴く私達は、聖日集会で学んだことを、次の土曜日までの間に何とか振り返りたい。

H姉が11月19日退院され、今は一口一口の食事を、主様の生命をいただく思いで食べておられるとのこと、皆さんお祈りください。また、本日、奥田先生から、熟読を要するとして、東京キリスト召団新宿集会所の小池辰雄聖書講筵録「預言者イザヤの召命」(本年11月18日集会テキスト)が、回覧文書として配付された。



エレミヤの命がけの預言の言

——エレミヤ書(第9回) 36章～39章——

2012年12月2日

聖書朗読 マタイ伝5章1～12節、6章6～15、19～21、25～34節

今年も残すところ1か月となりましたが、1日1日、主様から与えられた役目をしっかりと果たして来たるべき年を迎えたいと思います。

今日は、最近では余り歌わない聖歌(467「みくにのここちす」)を選ばれました。

「悲しみ尽きざる

浮世にありても

日々主と歩めば

み国の心地す

ハレルヤ! 罪とが

消されし我が身は

いづくにありとも

み国の心地す」

という素晴らしい歌詞です。

この聖歌を歌っていると、

「この世では、人に言えないような辛いことや悲しみが多くあるかもしれないが、私と歩めば、私が全てを引き受けるので思い悩まないでも大丈夫だ。」

と主様の声が聞こえてくるような気持ちになります。

聖書朗読は、マタイ福音書の5、6章を選ばれました。旧約聖書を学ぶ中であっても、絶えず新約聖書に立ち返り、信仰の原点を思い起こすようにとの先生の思いが伝わってきました。

エレミヤ書は、36章から39章までを語られました。歴代王の系図など難解な箇所はありますが、その要点は、

「エレミヤは命がけで神様の啓示を預言したが、イスラエルはその預言を聞かずに背き続け、滅亡に至った。自然の人間は、神に背き続ける存在であるが、その背きを根底から担われ、我々を父なる神様と結びつけてくださったのがキリストである。」

という深いメッセージでした。



周辺諸国に対する預言

——エレミヤ書(第11回) 46章～51章——

2012年12月16日

聖書朗読 ヨハネ伝4章1～26節

今年も余すところ2週間ばかりとなった。1年を振り返り、まず心に浮かぶのは主キリストに在る恵みである。

「みかみの恵みを 思い見れば、

うれしき余りて 歌とぞなる。」(讃美歌93番)

顔を上げて高らかにこの歌を歌えることが嬉しい。

本日の聖書朗読の箇所は、私が京都集会に導かれるきっかけとなったところで、ここを読むたびに当時のことを思う。あそこ、枯れかけていた魂に「活ける水」を注いでいたのだ。

エレミヤ書の連続講筈もいよいよ終わりに近づいた。本年9月以降、エレミヤ書に取り組んで勉強してきたが、紀元前の記事であり難解であることは避けられない。奥田先生は煩をいとわず、毎回参考資料を作成し、先陣となつて解説を担当してくださった。

本日の講筈は、エレミヤ書46章から51章を中心に、イスラエル、ユダ周辺諸国に対する預言を学んだ。厳しい試練の言葉あり、叱責あり、また、滅びの預言があり、繁栄を回復する約束の預言もある。神の審判は、^{さばき}「主に向かつて高ぶつた者」に向かい、「傲慢」^{ごうまん}の者に臨む。しかし、次のようなイザヤ書を思わせる慰め深い言葉もある。

「わたしの僕ヤコブよ、恐れるな。イスラエルよ、おののくな。見よ、わたしはお前を遠い地から、お前の子孫を捕囚の地から救い出す。ヤコブは帰つて来て、安らかに住む。……わたしがお前と共にいる。」(エレミヤ書46章27～28から抜粋)

苦難の預言者エレミヤ、その生涯と預言の言葉を学んできて考える。私達を聖別し、共にいてくださり、その口に主の言葉を授けてくださった主キリストの御力に全托し、来年こそは恐れず、ひるまず、この身をもつて主を証ししていかなければならないと。

クリスマス集会まであと1週間。讃美歌121番「まぶねのなかに」に歌われている主キリストの御生涯を深く想つて、その日を祈り待ちたい。



クリスマスの恵み

2012年12月26日

聖書朗読 ルカ伝2章1〜35節

2012年のクリスマス集会は、12月23日(日)くに荘において開かれました。決して忘れることのできない一年の締め括りの集会です。2月に奥田幸子奥様が、5月に森下一男兄が、天に召されました。御降誕節集会の前に参会する者各人に「宿題」が出され、奥田先生の降誕節講筵「クリスマスの恵み」は、この一年の歩みの結実であったと思います。

私達は此の地にあつて、主様に、天に属する者である、私達が、どの一人をとつても、主様の贖いを身に受け、それゆえどんな事態に直面しても主様と一つであること。まことに魂の中に光を照らしていただいた、静かなそして内的に充実した御降誕節集会でした。先生が配付された資料の第一文

「キリストは生まれながらにして十字架を背負っておられた。」

を覚えておきましょう。この資料の聖書引用箇所を目をとおしましょう。

